山に帰るアズマヒキガエル劇場

天岸祥光

これは別ページで紹介を始めた「静岡市郊外でお米を作って23年」と同じ棚田でのアズマヒキガエルの誕生から山への旅立ちの写真物語です。

この棚田には少なくとも数種類のカエルが生息しいて、その中で山に帰っていくのはこのアズマヒキガエルです（モリアオガエルも帰る）。オタマジャクシから孵ったばかりの小指の先ほどの幼カエルが列をなして山に帰っていくという話はよく聞くけれど、私はここ20年来この棚田で見たことがありませんでした。当時は一カ月に二回だけの集合（偶数土曜日）でしたから、当然見られるチャンスは少なかったわけですが、なかなか見られなかったもう一つの理由がありました。

それは、棚田のアズマヒキガエルたちが、カラスの襲撃をだんだん受ける羽目になり、オタマジャクシは食べられる、自分たちは獺祭（だっさい）よろしく倉庫の屋根に祭られることになってしまい、この棚田で卵を産むのを止めてしまったのです。

だからといって、カエルたちはへこたれたわけではありませんでした。棚田より約200㍍先の高台（棚田より30~40㍍高い）の木々に囲まれた安全な自然の溜池に卵を産むことにしたのです。

その山の池に春三月集合する彼らの姿を紹介しましょう。

産み付けられた卵は狭い池一杯になり、生み終わると親たちは無責任にもさっさと山に帰っていってしまいます。実はその後が大変なのです。

孵ったオタマジャクシは池一杯にあふれ、雨が少ないと水が腐って臭気が漂ってきたりします。それでも2カ月くらいするとまず後ろ足が出始め、やがて前足が出始めると風雲急を告げてきま

写真1.　棚田に集まってきた産卵直前のアズマヒキガエル（メンバーの竹内さん提供）

写真3.　その山の溜池へ急ぐカップルたち

写真6.　オタマジャクシで池は真っ黒です。

写真2.　白い矢印のあたりにその池があります。

写真4.　山の溜池にはあちこちから集まった同士でいっぱい

写真7.　後ろ足が出はじめたオタマジャクシ

写真5.　狭い池が卵いっぱいになります。

写真8.　池の淵に集まり上陸態勢

写真9.　上陸し、岩を登るカエルたち

写真10.　難しいところを登るカエルたち

す・・・などと今は書けますが、このことを教えてくれたのが、最近このミュージアムに赴任された、両生類が専門の岡宮久規主任研究員でした。

彼の説明によると前足が出ると、尻尾が少しあっても上陸して山に向かうというのです。それを聞いて、前足が出てからは、万障繰り合わせて連日朝から通い詰めること1週間。その甲斐あって、大挙して上陸し、山に向かう姿を写真に収めることができましたが、予想とは大外れなこともありました。

前足が出始めたカエルから池の淵に集まり上陸態勢に入ります。

上陸したカエルたちはリーダーがいないので、やみくもにあちこち無理な登山を始めるのもいましたが、数が多いので無難な方向に登っていくのももちろん沢山いました。

ただ一つ気になったのは、上陸したカエルたちはそんなにはきはき歩かないのです。九州の宝満山のアズマヒキガエルの登山をNHK「ダーウインが来た！」で紹介した岡宮研究員の話では、一日200㍍くらいは進むとのことでしたが、どう見てもこちらのヒキガエルはそんなつもりは全くない様子なので私も考え込んでしまいました。

写真11がグループの先頭ですが、池からさほど離れていないのにもうほとんど進もうとしなくてうろうろしているだけなのです。

天気がいいとあまり動かないということも言われているので、そのせいかなとも思いましたが、時間が経ってから見ると、それぞれ勝手に藪の中に入っていこうとしているように見えました。ばらばらにブッシュの中に入って行かれては、どこまで登っていくのかなどという初期の追及意欲は失せてしまいます。つまりこんな小さなのろのろ動く一匹の黒い生き物を人が入るのも容易でない藪の中を見失わずに長時間追及するのはいくら何でも無理でした。

何故池からさほど遠くないところで、もう歩みをほとんど止めてしまうのか考えてみることにしました。結論としては、ここは棚田から200㍍くらい離れた高台で、昔幼カエルたちが棚田から登ってきたところだと仮定すれば、もうこれ以上登る必要はないのではないかと思い至ったのでした。

この結論が正しいかどうかはわかりませんが、そう自分を納得させて今年の「調査」は終了としました。幼カエルたちもかなりの雨が降った次の日にはほとんど池周辺からいなくなっていました。登っている途中雨で流されたのもいたでしょう。

写真12が最後の一匹でしょうか。よく見ると周りにこの急な坂の岩を登り切れなかった先発隊の姿も散見します。

この山の溜池の周辺で、時々ヤマカカシを見かけました。もしかするとこの蛇がアズマヒキガエルの山での天敵なのかもしれません。

写真11. 先頭グループ

写真12. 最後の一匹